

## 専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

4回生の大竹です。

私は、高齢者施設に勤務していた時に、よりよい介護福祉士を目指したいと思ったのがきっかけで、30代に入って専攻科福祉専攻に入学しました。

学生一人一人と丁寧に向き合ってくれる素敵な大林先生や20代の年齢の違う同級生がよい介護がしたいという夢を持ち、互いに高めあうことのできるクラスメートに出会えて、とても充実した大学生活を送ることができました。

特に思い出すのは、障害のある方々や高齢者の社会参加の場を大学内外で行った「福祉情報展」で、脳性麻痺などで手が不自由な方の絵を集めた「こころの創造展」、「障害のある方の着付け教室」等でした。

この企画は、大林先生が看護師であったことから、病気は治って退院しても、地域社会で生き生きと生活をしづらい人生を送っている人との出会いから、医療は命を救うけど、福祉はその人の生活と人生に寄り添うことができる。と言われたことを胸において福祉の仕事を誇りに感じています。

専攻科はたった1年でしたが、介護の現場から離れてみて、現場で学べない人間の可能性や価値を利用者の方の持っている悲しみや喜びの気持ちに寄り添う気持ちに気づくことの学びから、自分が変化していきました。

介護に必要な知識・技術だけでなく、自分に介護観が養われ、介護とは何か、を深く考えられるようになりました。

卒業してからは介護だけでなく、新生児から高齢者・障害者自身や家族に対して幅広く対応できる援助者を目指せるきっかけになりました。

現在は、産婦人科で小児分野を扱う保育職についています。来年度から、専攻科が20年目にして廃止になって、先生方までいなくなると思うと、その存在を失うようでとても寂しいですが、いい先生、いいクラスメート、いい学びに出会え、いい専攻科で学べたことは、本当に私にとって良かったです。大変感謝しています。ありがとうございました。

2021年4月

4回生 大竹由夏